

Title	二〇世紀初、朝鮮東北部のルーブル紙幣流通：近代東アジア域内流通と朝鮮の地域経済
Author(s)	石川, 亮太
Citation	待兼山論叢. 史学篇. 35 p.27-p.49
Issue Date	2001-12
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48074
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

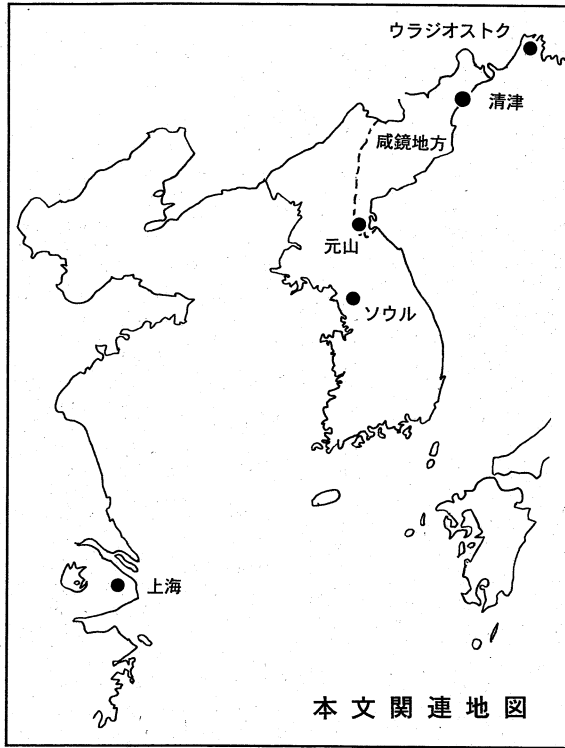
二〇世紀初、朝鮮東北部のルーブル紙幣流通

— 近代東アジア域内流通と朝鮮の地域経済 —

石 川 亮 太

一 問題の所在

一八七六年の日朝修好条規締結から一九一〇年の植民地化に至る間、朝鮮にとって最大の貿易相手国は常に日本であった。それゆえ、近代朝鮮の対外貿易に関する研究が、日朝貿易を中心に進められてきたことは当然ともいえる。しかし、朝鮮が自由貿易の門戸を開いたのが日本に対してだけではなかったことは、注意しなければならない。一八八〇年代に入ると、朝鮮は、いまだ宗属関係にあった清朝を含め、諸外国と条約を結ぶこととなった。近年では、このような事態を朝鮮によるアジアの自由貿易体制への参入と捉え、多角的な東アジア域内流通の中に朝鮮を位置づけようとする研究が現れている。⁽¹⁾このような視角の登場によって、朝鮮の開港をより広い国際環境のなかで考え得るようになったのみならず、従来研究が蓄積されてきた日朝貿易についても、その東アジア史的な意義づけを改めて問いなおすことが可能となった。



ところで、朝鮮では、一八九四年の日清戦争までに三港、一九一〇年の植民地化までにさらに七港が開港された。各港ごとの貿易相手先や商品の構成は様々で、全国レベルの統計における構成とは大きく異なる場合もあった。このような地域差は、朝鮮の東アジア域内流通への参入過程における、看過しえない特徴の一つであろう。⁽²⁾ 本稿はこの点に注目し、朝鮮の地域経済が東アジア域内流通にいかなる形で接続していたかを、事例を通じて考察することとした。

ここで取り上げるのは、一九〇〇年代の朝鮮東北部におけるロシア・ルーブル紙幣の流通である。ロシアは、日本と同じく一八九七年に金本位制に移行し、国立銀行券を発行した。その一部が極東の国境を越えて朝鮮に流入していたことは、従来から知られてはいたものの、本格的な検討の対象とはされず、梶村秀樹によって若干の検討が加えられたに過ぎない。⁽³⁾ 梶村の検討も、朝鮮東北部とロシア領沿海州との二地域間関係に止まっている。しかし一九〇〇年代とくに前半の東アジアでは、ロシアの政治

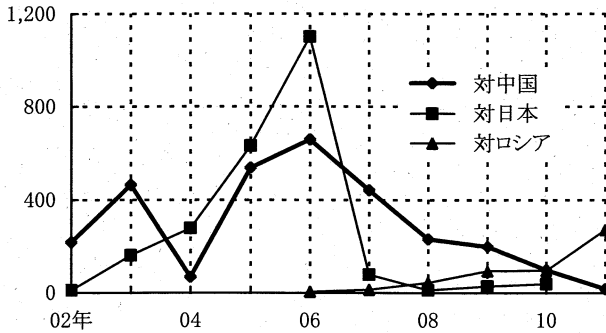
的進出を背景に、ルーブル紙幣の流通圏もロシア領を越えて満洲全域に広がっていたことが知られている。⁽⁴⁾ 本稿では、右のような国際環境を念頭に、朝鮮東北部をめぐるルーブル紙幣の流通を、より多角的な地域間関係の中で捉え直すこととしたい。

二 ルーブル紙幣の流通パターン

本稿で扱う朝鮮東北部は、一九〇〇年代当時の行政区画名でいえば、咸鏡南道・咸鏡北道（道は最上位の地方行政単位）にあたる。本稿では以下、兩道を合して咸鏡地方と呼ぶことにする。一九一〇年末時点の咸鏡地方の人口は約一三〇万人で、これは全朝鮮の九・七％にあたる。⁽⁵⁾ 地勢は山勝ちで、平野は海岸に沿って点在するに過ぎない。そのため、河川航通や他地方との陸上交通には自然条件の制約がある一方、後述のように、沿岸航通は開港以前から発達していた。

さて、咸鏡地方は、北側に豆満江（中国名は図們江）を挟んで中国に接するとともに、一八六〇年の北京条約で沿海州がロシア領に帰した結果、ロシアとも接することになった。ロシアは、この沿海州の中心的な海港としてウラジオストク Vladivostok を建設した。梶村秀樹によれば、二〇世紀初頭の咸鏡地方北部は、後背地が未開発のウラジオストクに食糧・労働力を供給する役割を担っていた。そして、咸鏡地方北部とウラジオストクの間を年々約一万人の出稼者が往来した結果、毎年少なくとも三五万ルーブルのルーブル紙幣が咸鏡地方北部へ流入していたとされる。⁽⁶⁾ しかし梶村は、咸鏡地方北部へのルーブル紙幣流入の原因と流入額の検討を行ったのみで、流入後の流通の状況については触れていない。そこで、統計資料を利用して、咸鏡地方をめぐるルーブル紙幣流通の基本的な

グラフ1 元山におけるルーブル紙幣流出額 (千円)



(注)

1902, 03, 10, 11年はもとルーブル表示。1ルーブル=1円に換算。1904年の値は4～6月分を含まず。1906, 07年の対日露流出額には日本紙幣も含む可能性あり。

(出典)

(1902, 03年)『通商彙纂』M37-9(1904年)『全』M37-41, M39-16, M40-36。ただし第2四半期を欠く。第3, 4四半期は1905年各四半期報所載の前年値。(1905年)『全』M38-64, M39-12, M40-36所載四半期報合計。(1906, 07年)『韓国外国貿易概況』1907年版。対中国は「露国紙幣」、対日露は「紙幣」の値。(1908年)『元山貿易一斑』1909年所載の前年値。(1909年)『韓国外国貿易要覧』1909年版。(1910, 11年)『朝鮮貿易要覧』1910, 11年版。

パターンを明らかにしよう。

ウラジオストクから咸鏡地方への貨幣流入がいつ頃から始まったかについては、両地間の沿岸・陸路交易に関する統計資料の不備から、確定は困難である。しかし、一八九六年の日本人による調査報告によれば、ウラジオストクから紙幣やメキシコ銀貨が流入していたものの、その流通範囲は概ね咸鏡地方北部に限られていたという。⁽⁷⁾ところが、海関報告によれば、一九〇二年頃から、咸鏡地方南端の開港場である元山でもルーブル紙幣が見られるようになったとされ、一九〇〇年代初頭から咸鏡地方南端にまでルーブル紙幣の流通範囲が及んだようである。

そしてこの一九〇二年以降、日本領事報告等に掲載された元山の貿易統計では、ルーブル紙幣の流出額のみが得られる。グラフ1は、現在得られる一九〇二～一一年の数値を示している。一九〇四～一〇六年に日本向けが、一一年にロシア向けが首位となっているが、それ以外の年では中国が最大

の相手先となっている。一方、国外から元山へのルーブル紙幣流入については、統計的にはその存在を確認できない。このことから、元山に流入したルーブル紙幣は、いったん国内の他の場所に流入したものが、国内流通を通じて再流入したものと考えられる。先述のように、咸鏡地方北部では朝鮮人出稼ぎ者を通じてルーブル紙幣が流入していたことを考慮すれば、ウラジオストクから咸鏡地方北部に流入したルーブル紙幣の一部が、元山を経て中国・日本等へと流出していたと考えることができる。⁽¹⁰⁾

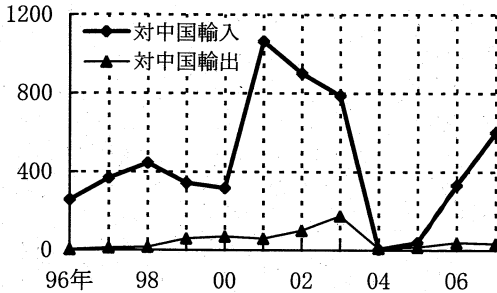
このようにルーブル紙幣は、咸鏡地方とウラジオストクとの間にとどまらず、東アジアのより広い空間にわたる流通パターンをなしていたことが確認できる。

三 国際流通パターンの形成過程

ここでは、前節でみたルーブル紙幣の流通パターンの形成過程を、主に国際的な条件に注目して論じる。その際、グラフ1に見られるように、元山からのルーブル紙幣流出が中国向け流出に始まったことから、中国向け流出が開始された契機に焦点を当てることとしよう。日露戦争中の対日流出増加については後に五で触れる。

この時期における元山の対中国貿易を、商品貿易についてのグラフ2、貨幣・貴金屬移動についてのグラフ3によつて概観してみよう。⁽¹⁰⁾ いずれも一九〇〇年代初頭に変化が生じていることが分かる。商品貿易では一九〇一年を境に輸入超過幅が拡大し、日露戦争前年の一九〇三年までその傾向が続く。対して、貨幣・貴金屬は一貫して元山からの流出のみが確認されるが、構成品目を見ると、当初首位にあった金が一八九〇年代末から減少するのと入れ替わつて、一九〇二年からルーブル紙幣の流出が見られるようになる。

グラフ2 元山の対中国貿易（千円）



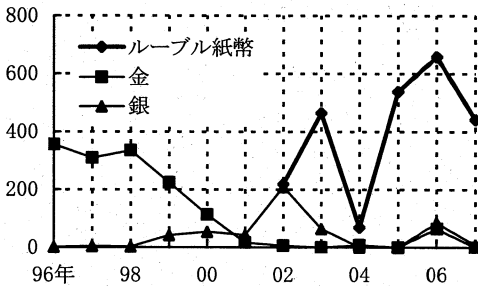
(注)

1908年以降は統計原則が積荷地／荷揚地から原産地／消費地別に変更、07年以前と比較が困難。

(出典)

(1896～00, 02, 04年) 順に『通商彙纂』号外(M31), 107, 140, 186, 200, M37-7, M39-31。
(1901, 03, 05, 06年) *Returns of trade and trade and trade reports*, Wonsan 各年版。(1907年)『韓国外国貿易概況』1907年版。

グラフ3 元山から中国への貨幣・貴金属流出（千円）



(出典)

ルーブル紙幣はグラフ1、金・銀はグラフ2と同じ

中国からの商品輸入が一九〇一年から拡大したのは、日本領事報告によれば、ウラジオストクの無関税港制がこの年停止されたためであったという。すなわち、一九〇一年以前において、咸鏡地方北部の朝鮮人は、ウラジオストクに食糧・労働力を供給する対価として、「金巾かなきん」（平織絹織物の一種）、洋反物並に支那絹織物類などの輸入工業製品をウラジオストクの華商から購入していた。ところが、関税改定によってウラジオストクでの工業製品価格が上昇したため、代わって元山華商の輸入した工業製品が咸鏡地方北部へ供給されるようになり、元山華商の仕入

先である中国からの輸入が拡大したといふのである。⁽¹¹⁾ 知られているように、一九世紀後半以降の東アジアでは、上海を中心とした華商通商網が形成され、これを通じてイギリス製綿製品をはじめとした輸入工業製品が各地に再輸出されていた。⁽¹²⁾ 咸鏡地方における工業製品の輸入経路の変化も、このような華商通商網の末端における再編成として理解することができよう。

さて元山華商にとつて、ウラジオストクの関税改定という外的要因を契機とした輸入の急増は、決済手段の調達という問題を同時にもたらしたと考えられる。グラフ2から分かるように、元山の中国に対する商品貿易は、もともと一九〇一年以前から輸入超過であつた。開港後の朝鮮においては、元山のみならず、全体的に中国に対し入超傾向にあつた。そのため对中国貿易の担い手であつた朝鮮在住華商は、中国との決済にあたり、日本の取引先を経由した多角決済や、砂金や日本円銀の对中国現送といった方法をとるのが普通であつた。⁽¹³⁾ 元山華商も、一九世紀末に至るまで砂金現送によつて对中国決済を行うことが多かつたといふ。⁽¹⁴⁾ グラフ3に現れる中国向け金流出も、華商の对中国決済を反映したものと考えられる。⁽¹⁵⁾

しかし元山の中国向け金流出は、グラフ3のように、一八九〇年代末から減少してゆく。この時期は、日本の金本位制移行（一八九七年）に伴つて朝鮮産金の日本への吸収が政策的に図られ、朝鮮全体で見ても、金の流出先が中国から日本へとシフトした時期であつた。⁽¹⁶⁾ 一九〇一年以後の中国からの商品輸入拡大は、こうした金の対日吸収が進むなかで起きたのであり、元山華商は深刻な对中国決済手段の不足に陥つたものと推測される。

日本領事報告によれば、このような元山華商の对中国決済問題は、当時同時に発生していた、咸鏡地方とウラジオストクとの間の決済問題と結びつけて解決が図られることになった。すなわち、ウラジオストクでは、関税改定

によつて咸鏡地方への工業製品輸出が減退した後にも、咸鏡地方から供給される食糧・労働力への需要は減退しなかった。そこで、ウラジオストクから咸鏡地方に向けての、工業製品に代わる決済手段が求められ、ルーブル紙幣や砂金が新たに流出することとなった。そしてこのルーブル紙幣が、対中国決済手段不足に悩む元山華商の手で上海へと現送されることになった、というのである。⁽¹⁷⁾ このような領事報告の記述はグラフ3とも整合的である。

ところで、元山華商の右のような対応が可能となるためには、当然ながら、上海においてもルーブル紙幣が受領されなければならない。上海のルーブル紙幣流通について詳細には知り得ていないが、元山から上海に送られたルーブル紙幣がどのように処理されたか、断片的な史料から窺うことにしよう。一九〇〇年代の日本人の調査によれば、元山から上海へ現送されたルーブル紙幣は、「露清銀行に提供し〔中略〕その地の通貨に引替」られる場合と⁽¹⁸⁾、上海からさらに「北清地方へ転送」される場合があつた。⁽¹⁹⁾ 露清銀行は、一八九五年にロシア・フランス資本の主導で設立され、満洲を中心に中国本土や日本にも支店網を展開した銀行である。⁽²⁰⁾ 上海支店の設置は一八九六年である。同行はロシアの中国に対する経済政策の担い手であり、中国におけるルーブル紙幣の信用を維持するために、できる限り金平価によつてその買い取りに應じる必要があつたと考えられる。⁽²¹⁾ 銀行の買い取り価格が金平価に準じて安定していたとすれば、華商の金地金による決済をルーブル紙幣による決済で代替することはより容易であつただろう。また、「北清地方へ転送」されたというルーブル紙幣も、一九世紀末から拡大しつつあつた上海・満洲間の交易を通じ⁽²²⁾、最終的には満洲の露清銀行に還流していた可能性があろう。いずれの経路にせよ、元山華商が上海でのルーブル紙幣受領を期待しえた背景には、日清戦争後の東アジアにおける露清銀行店舗網の展開と、それに並行したルーブル紙幣流通の拡大があつたと考えることができる。

以上のように、咸鏡地方をめぐるルーブル紙幣の流通パターンは、一九〇一年のウラジオストク関税改定を契機に、地域の収支構造が再編成される過程で形成された。その過程を主導したのは元山華商であり、そのルーブル紙幣現送による決済を可能とした国際的な条件は、日清戦争後の、満洲から上海に及ぶルーブル紙幣流通の拡大であった。⁽²³⁾

四 咸鏡地方内部におけるルーブル紙幣流通

前節では、元山から上海へのルーブル紙幣流出が開始された経緯を、東アジア全体の環境の中に位置づけて明らかにした。しかし二で見たように、元山から上海や日本へ流出したルーブル紙幣は、咸鏡地方の北部にいったん流入した後、咸鏡地方内部での流通を経て元山に至ったものであった。ルーブル紙幣が咸鏡地方の内部でいかに流通したかについては、朝鮮国内の条件から説明する必要があるといえる。

元山と咸鏡地方諸港との間では、元山が一八八〇年に条約港として開港される以前から沿岸流通が発達していた。一九〇〇年代の沿岸流通は、元山側の移出超過であった。⁽²⁴⁾ 三で見たように、元山から咸鏡地方北部への輸入工業製品の移出が一九〇〇年代初頭に増加したことも、このような沿岸流通の存在が前提となっていたといえる。咸鏡地方北部から元山へ流入したルーブル紙幣は、このような元山側の出超に傾いた沿岸流通の決済手段としての機能を負っていたと考えることができよう。史料からは、ルーブル紙幣が、輸入工業製品だけではなく、穀物などの国内産品の流通においても、咸鏡地方北部から元山への決済手段となっていたことが確認できる。⁽²⁵⁾

ただし、この時期の咸鏡地方に流通していたのはルーブル紙幣だけではない。一八九〇年代末の調査によれば、

農村部を中心に朝鮮王朝の鑄造した銅銭が流通するほか、元山や沿岸諸港では円銀や日銀兌換券もみられた。⁽²⁶⁾そこで、咸鏡地方内部でルーブル紙幣が担った機能について考える場合、これら他の貨幣との関係が問題となろう。

当時の朝鮮では、咸鏡地方だけではなく、全国的に多様な貨幣の流通が見られた。既存の研究から、開港後の朝鮮における貨幣流通の特徴を整理すれば、次のようである。⁽²⁷⁾第一に、農村での取り引きに用いられる貨幣と、都市・開港場間に流通する貨幣との分化が見られた。すなわち農村部では、小額貨幣（銅銭・白銅貨）が主に農産物取り引きを通じて一定の地域内を還流していた。対して都市や開港場間では、日本から流入した円銀や日銀兌換券、また一九〇二年以降は朝鮮所在の第一銀行支店が発行した第一銀行券（日銀券にリンク）等、日本円系の貨幣が用いられることが多かった。第二に、小額貨幣と日本円系貨幣との間では変動相場が建てられ、長期的にも短期的にも著しい変動が見られた。

それでは、右のような貨幣流通の構造の下で、咸鏡地方のルーブル紙幣はどのような位置を占めていたのであるうか。相場の関係から考えてみよう。日露戦争前のルーブル紙幣相場を継続的に知ることはできないが、一九〇四年一月の日本領事報告によれば、元山における円のルーブル紙幣建て相場は、一〇〇円〇九・五〇ルーブル内外で安定していたという。⁽²⁸⁾金平価で比較すれば一〇〇円〇九六・九〇ルーブルであったから、⁽²⁹⁾元山でのルーブル紙幣相場はやや低めながら平価付近にあったといえる。対して元山での円の銅銭建て相場を見ると、一九〇三年の各月平均相場は、一円〇六七・二文（三月）から七九七・七文（七月）の間を変動していた。⁽³⁰⁾円とルーブル紙幣の相場が安定していたとすると、ルーブル紙幣の銅銭建て相場もこれと同様の変動をみたと推測されよう。

ここから、咸鏡地方のルーブル紙幣は、都市・開港場間に流通する日本円系の貨幣と連動する一方、農村を中心

に流通する銅銭の需給変動からは一応切り離されていたといつてよい。とすれば、ウラジオストクから流入したルーブル紙幣は、農民の出稼ぎによつて稼得されたものであつても、銅銭とともに農村の取り引きに滞留する可能性は低かつたであらう。対して、咸鏡地方の沿岸流通に従事する元山の商人にとつて、もともと隔地間流通の決済手段となつていた日本円系の貨幣に対して安定している点で、ルーブル紙幣の使用に抵抗感は少なかつたであらう。⁽³¹⁾

ルーブル紙幣が咸鏡地方北部に流入した後、咸鏡地方内部での流通を経て元山に集中したことは、朝鮮国内の貨幣流通構造のなかでルーブル紙幣に与えられた、右のような位置づけから理解ができると思われる。

このようにルーブル紙幣は、国際的な決済手段として流入・流出するのに加え、咸鏡地方内部では、沿岸商品流通の決済手段として流通していた。それでは逆に、咸鏡地方内の沿岸商品流通は、決済手段であるルーブル紙幣が国境を越えて流通していたことによつて、いかなる影響を受けていたのだろうか。ここでも前節と同様に、元山華商の活動から考えることにしよう。元山華商は、上海からの商品の輸入とその咸鏡地方内部での販売を通じて、ルーブル紙幣の咸鏡地方内部での流通と上海への流出とを結びつける立場に立っていた。

元山華商によるルーブル紙幣の受け取りと上海への現送が、いかなる関係にあつたか、次の史料から見てみよう。「元山の」清商は、「ルーブル紙幣を」本国特に上海の仕入先に送付するに当りて、「テール」相場に依り益する処あるを以て、該紙幣を日本人よりも参銭方高価に授受するか故に、韓人か喜んで清商と取引するは勢の免れさるところにして、之か為め清国より来る金巾類の販路活発なるに反し、日本人は大打撃を蒙ることあり」。⁽³²⁾この史料が具体的に何年の状況について記述したかは、残念ながら不詳である。だがこの史料から、元山華商にとつて、元山のルーブル紙幣買い取りの多寡は、中国からの商品輸入に影響を与える重大な問題であつたことが確認できる。

また、史料中の「テール相場」は、おそらく上海の銀両相場であり、上海に輸出されたルーブル紙幣はこの上海銀両に対して売却されたものであろう。元山華商は、この上海銀両相場との関係で許される範囲で、朝鮮人にとってより有利にルーブル紙幣の買い取り価格を提示することで、より多くのルーブル紙幣を獲得しようと図っていたことが分かる。⁽³³⁾

このように、元山華商は上海の金融市場の動向に注視しつつ、それに対応して元山でのルーブル紙幣買い取り価格を決めていたと考えられる。そして、買い取られるルーブル紙幣は咸鏡地方内の沿岸商品流通の対価として元山に流入していたのであるから、上海の金融市場の動向は、咸鏡地方内の沿岸商品流通にまで影響を及ぼす可能性があったといえる。次の史料は、その可能性が現実のものとなったことを示している。日本領事報告によれば、日露戦争が終結し講和条約も調印後の一九〇五年一〇―十一月頃、元山では、咸鏡地方北部の朝鮮人商人がルーブル紙幣を持参して来港し、元山に輸入された綿製品や穀物類を咸鏡地方沿岸へ再移出していた。ところが、「其取引上漸く活気を催し来りて一時繁忙を極めんとする矢先き、十一月下旬中上海に於ける露紙幣の換算相場下落の入電あり。随て当港相場も三四銭方の低落を告げたれば、韓商等の猝かに其態度を一変して容易に之を手放さず、商界為めに一大打撃を受けて一切の商品は渺々しき荷動きなく、就中〔朝鮮南部から移入された〕米穀類の如きは思惑的輸入も渺からざりしかば、一時多大の停滞を見るの止むなき悲境に陥りたり」⁽³⁴⁾のような事態が起きた。ここから、前段に挙げた史料とは反対の方向ながら、上海における金融市場の動向が元山のルーブル紙幣相場に反映していたことが再確認できる。そして、咸鏡地方の朝鮮人商人がそのような元山のルーブル紙幣相場の変動に敏感に反応していたことも確認できる。さらに、そのような朝鮮人商人の反応が、咸鏡地方沿岸の商品流通の動向にも影響を及

ぼしていたことが分かる。たとえば米穀が朝鮮南部から元山を経て咸鏡地方諸港に移出されるような場合、元山から咸鏡地方諸港に至る流通環節については、ルーブル紙幣相場の影響下に置かれていたことが読み取られる。

他の史料によれば、この時の上海ルーブル紙幣相場の下落は、講和条約の批准書交換を受けたもので、一時的現象に止まったようである。⁽³⁵⁾ また、五に後述するように、この時期に元山に流入するルーブル紙幣が特に多かったことは考慮する必要がある。とはいえ本史料から、咸鏡地方沿岸の商品流通が、ルーブル紙幣を決済手段の一つとして用いるようになったことで、上海市場の動向から直接に影響を受けるようになり、上海におけるルーブル紙幣相場の安定がひとたび失われれば、それに伴って不安定とならざるを得なかったことが確認できよう。

五 ルーブル紙幣回収と朝鮮の植民地化

三、四では、元山から中国へのルーブル紙幣流出に焦点を当てて論じてきた。しかしグラフ1から分かるように、日露戦争中から戦争終結直後（一九〇四―〇六年）にかけては、日本への流出が急増している。本節ではその背景について考え、さらに日本による保護国植民地統治下でのルーブル紙幣流通にも検討を加えることとしよう。

一九〇九年の日本人の調査によれば、元山から日本に流出したルーブル紙幣は、上海に流出した場合と同様、露清銀行の在日本支店に売却されたとい⁽³⁶⁾い。対日流出の背景にも露清銀行店舗網の展開があったといえる。しかし、一九〇四―〇六年の日本への流出増加が具体的に何を契機として起きたのか、直接に知りうる史料はない。ただしグラフ2のように、戦争中の一九〇四―〇五年には中国との商品貿易が急減しており、対応するように一九〇四年の中国へのルーブル紙幣流出も減少している。一方で、日露戦争初期には咸鏡地方北部がロシア軍の占領下に置か

れ、軍によってルーブル紙幣が散布されたため、朝鮮人商人の手で元山に回送されてくるルーブル紙幣は増加していた。⁽³⁷⁾このように、中国へのルーブル紙幣流出が一時減少するなか、元山に回送されてくるルーブル紙幣は増加したことで、新たにその日本への流出機会が増加したことは確かであろう。

日本へのルーブル紙幣流出の担い手についても未詳である。しかし、貿易商人だけではなく日本の金融機関の関与も存在したと推測される。というのは、一九〇五―一九〇六年にかけて咸鏡地方に第一銀行の三店舗が新設され、そこで買い取られたルーブル紙幣がグラフィの対日流出額に含まれている可能性があるからである。一九〇六年に第一銀行で買い取られたルーブル紙幣は、咸鏡地方南部（咸鏡南道）所在の二店舗（元山、咸興）で五七・七万ルーブル、北部（咸鏡北道）所在の一店舗（城津）で四・六万ルーブルであった。⁽³⁸⁾

さてグラフィによれば、一九〇七年以降、元山から日本へのルーブル紙幣流出は再び減少する。しかしこのことは、ルーブル紙幣の流通パターンが日露戦争以前のそれに戻ったことを意味しない。なぜならこの頃から、日本の保護国統治下で、権力的なルーブル紙幣排除が開始されたからである。韓国政府度支部は、一九〇八年より、公納・買い取りを通じたルーブル紙幣の回収を開始した。そして実際の回収作業に従事したのは、日本による全国的な財政・金融制度改革の下で各地に設置された、農工銀行や地方金融組合であった。⁽³⁹⁾

それでは実際の回収状況はどうだったのだろうか。表1は、諸金融機関によって回収されたルーブル紙幣の価格を示している。ここから、先に挙げた一九〇六年の第一銀行回収額とは反対に、咸鏡地方北部（咸鏡北道）での回収額が南部（咸鏡南道）での回収額を上回るようになったことが分かる。咸鏡地方北部で回収されたルーブル紙幣は、北部の開港場（城津・清津）を通じて日本・ウラジオストクへ送られた。⁽⁴⁰⁾一方元山では、グラフィから分かる

表1 咸鏡地方の金融機関によるルーブル紙幣回収額
(単位 ルーブル)

	咸鏡南道	咸鏡北道	計
1910年	220,558	247,736	468,294
1911年	271,823	95,592	367,415
1912年	60,443	333,306	393,749
1913年	156,519	466,394	622,913
1914年上半年期	58,416	319,318	377,734

出典：朝鮮銀行『時局ニ於ケル浦塩斯德金融貿易
並ニ一般概況』1914年、20頁。

ように、一九〇七年以後ルーブル紙幣の流出が全体的に減少してゆく。このことから、咸鏡地方北部に流入したルーブル紙幣は、元山まで回送されることなく、現地の金融機関を通じて日本・ウラジオストクへ流出することが増えていったと思われる。

このように、日本の保護国へ植民地統治下でのルーブル紙幣回収策は、ルーブル紙幣の流通パターンに大きな影響を与えた。ただし、表1では、第一次大戦勃発（一九一四年七月）直前まで年々回収額が増加している。このこ

とは、植民地化後も沿海州や満洲東部との貿易が継続し、ルーブル紙幣の流入そのものは増加傾向にあったことを反映している。⁽⁴¹⁾特に咸鏡地方の北端に位置する清津は、一九〇八年に開港場に指定され、同港から陸路を経由して満洲東部へ至る交易ルートは、朝鮮から満洲への新たな通路として、日本の政策的支援の下に成長しつつあった。⁽⁴²⁾このルートは、一九一〇年代前半においては清津側の満洲に対する出超に傾いており、その決済代金の一部としてルーブル紙幣が清津方面へ流入していたのである。⁽⁴³⁾

咸鏡地方北部へのルーブル紙幣流入は、一九一四年の第一次大戦勃発直後にロシアの金兌換が停止され、それまで日本円と等価に近かったルーブル紙幣の相場が急落することによって減少に向かう。⁽⁴⁴⁾しかしそれ以前において、日本の植民地当局は、ルーブル紙幣の流入そのものを止めることはできなかった。むしろ満洲東部への国境貿易の促進を通じて、決済手段としてのルーブル紙幣流

入を結果的に助長させしていたのである。

六 結論と課題

一九〇〇年代初頭の咸鏡地方は、地域の収支構造の変化を契機として、ウラジオストクから上海・日本に至る、ルーブル紙幣の国際流通パターンの一部に組み込まれた。咸鏡地方内部での商品流通も、右のようなルーブル紙幣の流通を通じて、直接に上海金融市場の影響を受けることになった。このような咸鏡地方の事例は、朝鮮の地域経済が、東アジア域内流通のなかで、相対的に自立した構成要素として機能する可能性を持っていたことを示唆している。

そのような可能性を地域経済に与えていた条件について、咸鏡地方の事例のみから一般化することは困難であり、他地域の検討も踏まえた上で再度検討しなければならない。しかし本稿の事例において、ルーブル紙幣の国境を越えた流通パターンが、華商通商網の存在とルーブル紙幣流通圏の拡大という国際的条件だけではなく、当時の朝鮮国内における貨幣流通の構造によっても規定されていたことに注意したい。このことは、地域経済の自立的な側面を認めることが、必ずしも朝鮮としての一国レベルでの検討の必要性を否定するものではないことを示している。⁽⁴⁵⁾

むしろ、朝鮮全体の市場構造の特性のなかで、各地域経済と東アジア域内流通との関係も理解されなければならないといえる。そのような視点を持つことによって、各地域の事例的研究から、朝鮮としての東アジア域内流通への参入過程の特徴を展望する道が開けるといえよう。

また本稿では、日露戦争後の日本による保護国・植民地支配の下で、ルーブル紙幣流通の形が変化してゆく過程

についても検討を加えた。日本によるルーブル紙幣の回収策は、ルーブル紙幣の流通パターンを改変はしたものの、流入そのものを止めることはできなかった。むしろ、政策的に促進された対満州貿易を通じ、ルーブル紙幣の流入が増加傾向にあったことが明らかになった。このことは、植民地化当初の日本の政策が、地域経済と東アジア域内流通との在来の関係を一方的に切斷することはできなかったことを示している。むしろ、在来の関係を利用しつつ流通の再編成を進めた面があったことさえ窺わせる。⁽⁴⁶⁾

ただし、本稿の検討は、一九一四年の第一次大戦勃発までに止まっている。第一次大戦の勃発以後、朝鮮の対外貿易の構造は、日本の大陸政策を通じて大きく変化して行く。その過程において、地域経済と東アジア域内流通との在来の関係は、いかなる変容を迫られたのであろうか。この点を検討することによって、日本の朝鮮植民地化が東アジア域内流通に及ぼした影響についても、より明らかに知ることができるように思われる。

(本稿は平成一三年度文部科学省科学研究費補助金による成果の一部である。)

註

- (1) 本稿の主題である流通の問題に限れば、華商通商網と朝鮮との関係を論じた次の文献がある。濱下武志「一九世紀後半の朝鮮をめぐる華僑の金融ネットワーク」(杉山伸也ほか『近代東アジアの流通ネットワーク』創文社、一九九九年所収)。古田和子「上海ネットワークと近代東アジア」東京大学出版会、二〇〇〇年。石川亮太「一九世紀末東アジア国際流通構造と朝鮮」『史学雑誌』一〇九編二号、二〇〇〇年。李秀允「日清戦争以前における朝鮮港場をめぐる日中朝商人の確執」『日本植民地研究』一二号、二〇〇〇年。

- (2) *李憲昶「韓国開港場の」(の)商品流通と(と)市場圈」『経済史学』九号、一九八五年。以下*印は朝鮮語文

献を指す。原題を表記し、ハングルを含む場合、筆者による日本語訳を「」に示す。

- (3) 梶村秀樹「旧韓末北関地域経済と内外交易」『商経論叢』（神奈川大学）二六卷一号、一九九〇年、三一五―三七頁。

- (4) 石田興平『満洲における植民地経済の史的展開』ミネルヴァ書房、一九六四年、五一―五一九頁。石田によれば、満洲のルーブル紙幣流通は、日露戦争後も主に満洲東部・北部において維持され、第二次大戦期まで続いた。なお以下本稿では、現在の中国東北地方に対し、歴史的地域呼称として満洲を用いる。

- (5) 朝鮮総督府『明治四十三年朝鮮総督府統計年報』一九一一年、第三八表。

- (6) 梶村「旧韓末北関地域経済」三〇六―三一八頁。

- (7) 「咸鏡道北部各港商況視察報告」『日韓通商協会報告』二二号、一八九七年、二八頁。

- (8) Korea Imperial Maritime Customs, *Returns of Trade and Trade Reports for the year of 1903*, Seoul, 1904, p. 167.

- (9) ただし確認しうる国内沿岸貿易統計ではルーブル紙幣の移動はほとんどない。元山へは海関統計の把握しない在来型船により移入されたとも考えうるが未詳である。とすれば同様に、咸鏡道地方外の国内諸港へ向け在来型船で移出された可能性も否定しえないが、記述史料上、管見の限りその形跡は皆無である。

- (10) 本稿では対中国関係に主眼を置いたため、元山の貿易統計も対中国貿易についてのみ掲載したが、実際には対日貿易が対中国貿易を上回る規模で存在したことは注意が必要である。例えば、グラフ2の時期の元山において、商品貿易総額に占める対中国貿易の割合は、最大の年で輸入が五一％（一九〇一年）、輸出が二三％（一九〇三年）である。残余のほとんどは対日貿易であった。

- (11) 「浦潮港関税引上ノ元山市場ニ及ホシタル影響」『通商彙纂』二〇一号、一九〇一年、一一頁。ウラジオストクでは、現地で生産されない消費財の輸入を目的として一八六〇年代から無関税港制を実施してきたが、ヨーロッパロシアにおける工業成長を背景に、一九〇一年に無関税港制を停止した。のち〇六年に一時再施行されるものの、〇九年には最終的に廃止された（高嶋雅明「ウラジオストク貿易概観（続）」『経済理論』（和歌山大学）一三四号、一九七三年、八五―九〇頁）。

- (12) 古田『上海ネットワークと近代東アジア』序章を参照。
- (13) 濱下「一九世紀後半の朝鮮をめぐる華僑の金融ネットワーク」八二―八八頁。
- (14) 「廿九年中元山商況年報」『通商彙纂』号外(三月三十一日)、一八九九年、九〇頁。
- (15) ただし流出した金のみではグラフ2の輸入超過を相殺しえず、他の決済手段の存在も想定しうるが、不詳である。
- (16) 村上勝彦「植民地」(大石嘉一郎『日本産業革命の研究』東京大学出版会、一九七五年、下巻所収)二五六―二七六頁。小林英夫「日本の金本位制移行と朝鮮」(刊行委員会『旗田巍先生古稀記念朝鮮歴史論集』龍溪書舎、一九七九年、下巻所収)一八五―一九二頁。
- (17) 「露国紙幣元山港輸出概況」『通商彙纂』明治三十七年九号、一九〇四年、三二頁。
- (18) 東京高等商業学校「韓国ニ於ケル貨幣と金融」一九〇九年、上巻一五頁。
- (19) 「露国紙幣元山港輸出概況」『通商彙纂』明治三十七年九号、一九〇四年、三二頁。
- (20) Rosemary Quested, *The Russo Chinese Bank*, University of Birmingham, 1977, pp. 49-52.
- (21) Questedによれば、上海・天津の露清銀行支店では、一九〇七ころ、ルーブル紙幣を減価なく買い取っていたといふ、推測を裏づける(*The Russo Chinese Bank*, p.51)。露清銀行を通じた義和団賠償金支払いとの関係も看過しえないが、本稿では検討が及ばなかった。なお、露清銀行の在中国店舗では、自身も銀行券を発行していたが、国立銀行券との関係等は不詳である。
- (22) 小瀬一「一九世紀末中国開港場間流通の構造」『社会経済史学』五四巻五号、一九八九年、三七―四六頁。
- (23) ルーブル紙幣上海現送の開始に、日本の金本位制移行も関係していることを考えれば、一九世紀末からの東アジアにおける金本位移行への趨勢が咸鏡地方のルーブル紙幣流通の基底にあったと考えることもできよう。二〇世紀への世紀転換期の東アジアにおいて、日本をはじめとした金本位移行の趨勢が、華商通商網の存在によっていかに規定されたかという問題は重要であり、既に指摘もされている。例えば、小島仁『日本の金本位制時代』日本経済評論社、一九八一年、一七七―一九七頁。また古田和子は、世紀転換期の東アジアにおいて、華商通商網と日本の国家主導に形成された新たな流通構造とがクロスオーバーした状況を、「境域の経済秩序」が変化する過程と表現している。古田和子「境域の経済秩序」(『岩波講座世界歴史』二三巻、岩波書店、一九九九年所収)七七頁。

- (24) 梶村「旧韓末北関地域経済」二九九―三〇五頁。*羅愛子「開港期（一八七六―一九〇四）民間海運業」『国史館論叢』五三号、一九九四年、八二―八九頁。元山の咸鏡地方諸港に対する移出超過額は、例えば一九〇三年において一二三万円であった（ただし西洋型船の交易額のみ。Returns of Trade and Trade Reports for the year of 1903より）。

- (25) 「元山三十七年第二季貿易」『通商彙纂』明治三十七年三五号、一九〇四年、二七頁。

- (26) 『明治三十年幣制改革始末概要』所載一八九七年元山領事報告（明治前期財政經濟史料集成）版、四九八頁。

- (27) *都冕会「갑오개혁 이후 화폐제도의 문란과 그 영향」（甲午改革以後、貨幣制度の紊乱とその影響）『韓国史論』（ソウル大学校）一二号、一九八九年、三八二―三九八頁。*吳斗煥『韓国近代貨幣史』韓国研究院、一九九一年、二〇七―二二四頁。

- (28) 「露国紙幣元山港輸出概況」『通商彙纂』明治三十七年九号、一九〇四年、三一頁。

- (29) 朝鮮銀行調査局『近世露国貨幣史』一九一七年、三九頁。

- (30) *吳斗煥『韓国近代貨幣史』所載の表八（二一六頁）より筆者換算。

- (31) 元山華商は朝鮮人との取り引きに際しルーブル紙幣の受け取りを好んだとされる（「商業上ヨリ見タル韓国ニ於ケル外国人就中日本人ト韓国入トノ関係」『貿易月報』九号、一九〇九年、七頁）。ただし日本人商人の場合、対日輸出農産物取り引きの必要から、日露戦争後まで銅錢授受を避け得なかった（「元山地方經濟状況」『財務週報』三号、一九〇七年、八七頁）。なお、農産物取り引きに起因する貨幣需給変動と国際金融との関係について論じた文献として、黒田明伸「周辺」からみた国際金本位制の特質」（中村哲『東アジア資本主義の形成』青木書店、一九九四年所収）。

- (32) 東京高等商業学校『韓国ニ於ケル貨幣ト金融』一九〇九年、上巻一五頁。

- (33) より詳細には、現在のところ、次のようなメカニズムの存在を想定している。本文中に述べたように、日露開戦直前の元山でのルーブル紙幣建て相場は、金平価の三%前後下方で安定しており、この状況は戦後の一九〇七年にもかわらなかった（第一銀行『株式会社第一銀行韓国各支店出張所開業以来營業狀況』一九〇八年、三三頁所掲の各月平均相場より）。先述のごとく上海では露清銀行で平価に準じた買い取り価格が設定されているとすれば、

元山で購入したルーブル紙幣を上海で銀に対して売却する場合、元山買取価格をやや高めに設定しても、上海銀相場が如何によつては、相当の利益が得られたであろう。

(34) 「元山ニ於ケル歳晚歳首貿易状況」『通商彙纂』明治三十九年一五号、一九〇六年、一頁。

(35) 高尾新右衛門『元山発展史』一九一六年、三七二頁。

(36) 東京高等商業学校『韓国ニ於ケル貨幣と金融』一九〇九年、上巻一五頁。

(37) 「元山三十七年第二季貿易」『通商彙纂』明治三十七年三五号、一九〇四年、二七頁。

(38) 第一銀行『株式会社第一銀行韓国各支店出張所開業以来營業状況』一九〇八年、三三頁。

(39) 高久敏夫『李朝末期の通貨とその整理』財団法人友邦協会、一九六七年、四四一四六頁。秋田豊『朝鮮金融組合史』朝鮮金融組合協会、一九二九年、二四七頁。

(40) 朝鮮銀行『咸鏡北道ニ於ケル経済状況』一九一三年、二一頁。

(41) 朝鮮銀行調査室『時局ニ於ケル浦塩斯德金融貿易並ニ一般概況』一九一四年、二〇頁。

(42) *金周溶『日本の(の)対間島金融侵略政策』(と)韓人の(の)抵抗運動研究(東国大学校博士論文、二〇〇〇年、八八一—一〇頁。

(43) この問題については別稿を準備中だが、さしあたり、朝鮮銀行『咸鏡北道ニ於ケル経済状況』一九一三年、一九頁。

(44) 「間島大正三年貿易状況」『通商公報』二〇三号、一九一五年、五〇頁。

(45) 前掲(注二七)河・呉はいずれも、近代朝鮮における貨幣の重層的な流通構造について、国家の財政収取のあり方にその一因を求めている。とすれば、朝鮮全体の市場構造を視野に入れた上で、ルーブル紙幣の地域的流通について検討する必要性は、より大きいといえよう。

(46) 梶村『旧韓末北関地域経済』(二二八—三二二頁)では、一九〇〇年代の咸鏡地方が、対ロシア交易を通じて、日本から相対的に自立した地域経済発展への展望を持つに至っていたとし、にもかかわらず植民地化後は、日本によつて地域経済の「より隷属的性格の強い日帝本位の植民地的再生産構造への改変が強行」(三一九頁)された結果、右のような展望は失われたとする。本稿の検討の結果は、植民地化後の地域経済の再編成過程に対する、右の

ような像に再検討を迫るものであろう。なお、一九一〇年代の朝鮮における流通の再編成過程については、朝鮮史の視点から、総督府側の意図は必ずしも一方的には貫徹せず、植民地下以前の流通構造からの規定を強く受けていたとする見解が現れている。東アジア域内流通の視点から、朝鮮の位置づけを考える際にも、右のような研究成果との対照が要求されるであろう。* 『역사문제연구(歴史問題研究)』二号(一九九七年)の特集「일제강점과 식민지 유통구조(日帝強占と植民地流通構造)」所載の諸論文を参照。

(大学院後期課程学生、日本学術振興会特別研究員)

**The Circulation of Rouble Notes in early Twentieth Century Korea:
Local Economy, Intra-regional Trade and Japanese Colonial Rule**

Ryota ISHIKAWA

This paper discussed the circulation of rouble notes in northeastern Korea in the early twentieth century, and its significance for the local and regional economics of East Asia. In the early 1900s rouble notes flew from Vladivostok into the northeastern Korea, and then flew out from there to Shanghai in large quantities. Through the formation of this system of circulation the local economy of northeastern Korea came into contact with the Shanghai money market, the centre of East Asia's international monetary transactions.

Two factors contributed to the establishment of this system. First, the regional networks of Chinese merchants responded to the opportunity created by Russia's invasion into East Asia after the Sino-Japanese War of 1894, and began to use the rouble notes. Secondly, there existed a multi-layered system of circulation of local and regional currencies in Korea, before the appearance of Russian note.

The circulation of rouble notes continued after Japan's annexation of Korea, and survived till 1914. It is thus possible to argue that the local economy of Korea was part of the East Asian regional monetary transactions from time to time, and that early Japanese rule effectively embraced the presence of the regional system.

キーワード：東アジア域内流通 朝鮮 地域経済 華商 ルーブル紙幣